

## かにた婦人の村と ドイツ女性ディアコニー

同志社大学グローバル地域文化学部助教  
レギーネ ディート

私は、かにた婦人の村を支援した女性、つまり奉仕女、ドイツ語でディアコニッセ [Diakonisse]、について研究しています。きっかけは、2年前の同志社大学で行われたチャペルアワーで、ディアコニッセであった私の叔母について話をした事です。また、その直後、神戸でディアコニッセとして生活するドイツ人女性と知り合い、日本におけるディアコニッセの歴史に興味を持つようになりました。それから私は、女性ディアコニーの歴史や目的、活動内容、また、日本で始まった経緯などを知る事になりました。

ディアコニッセはドイツで始まり、日本に伝えられました。初めて訪れた日本という国で、ドイツ人の彼女たちが社会福祉活動や伝道活動をする中で、どのような問題に直面し解決したか、日本の母の家やディアコニッセはドイツとどう違ったのかを、複数のディアコニッセの個人的な経験やライフヒストリーに焦点を当てて研究しています。

現在かにた婦人の村には、シュベスター [Schwester] 天羽道子さんお一人がディアコニッセとして働いておられます。かにた婦人の村が生まれた頃には7人だったそうです。彼女たちは寮母として働き、他にも重労働も含む様々な業務を担当していました。「いずみ寮」も主にディアコニッセにより運営されていました。

一番多い時で25人の女性が「ベテスダ奉仕女母の家」で共同生活していました。そして、ドイツ人ディアコニッセは、この三つの施設の誕生や日本人デイコニッセの養成に大きく貢献し、深津牧師と共に日本の「女性ディアコニー」を実現しました。

なぜドイツ人ディアコニッセが関わったか、女性ディアコニーの歴史を簡単に説明します。19世紀、ドイツで工業化が進んだ時に貧困者が増え、プロテスタントのキリスト教活動者が貧困者の保護や社会復帰、看護のための施設や新しい制度を作りました。この活動を進める中で、伝道や看護に従事するディアコニッセが誕生しました。

ディアコニッセの共同体を実際に始めたのはテオドール・フリードナー (Theodor Fliedner) 牧師とその妻フリデリケ (Friederike Fliedner) です。1836年に設立した施設で、プロテスタントの未婚女性が看護婦などの職業教育を受けディアコニッセとなりました。これまで、家の外で働くことが許されなかった彼女たちは、ドイツでプロフェッショナルな看護師の先駆者となったのです。ディアコニッセは母の家と呼ばれる共同体で生活していました。母の家は家族原理 [Familienprinzip] で運営され、ディアコニッセは家父長的な秩序の中で厳しい規則に従わなければなりませんでした。

19世紀後半には、ドイツ各地に母の家や彼女たちが奉仕する施設ができ、貧困や生活苦に陥った女性たちの更生施設も生まれました。例えばベルリンのマグダレーネン修道院 [Magdalenenstift] でディアコニッセは入所者に農業、看護、家財などの教育を行い

ました。また、各都市で「深夜伝道」とよばれる、売春婦支援や伝道活動も行われ、この活動にもディアコニッセは参加していました。

海外にも母の家が設立されるようになり、ディアコニッセは助産や看護などの奉仕活動を含む現地の女性に対する伝道を行うために、インド、そして、アフリカや中国の植民地に派遣されました。しかし、第一次世界大戦後に植民地への伝道が停止され、また、1949年、中華人民共和国が成立し、中国政府は全ての外国人宣教師を国外に退去させたため、宣教団は他のアジアの国々にその活動の拠点を移しました。更に、第二次世界大戦後、日本は貧困問題が深刻になっていたため、キリスト教の普及の可能性が高いとしてドイツ伝道協会の優先的な目的地とされました。そうした背景から1950年代に初めてディアコニッセが日本へ派遣されたのです。浜松と東京、そして神戸に母の家が設立されました。女性ディアコニーの日本派遣はドイツと日本のプロテスタント教会の支援により行われました。1951年にドイツに「ミッション協会の日本委員会」[Japan Komitee Deutscher Missionen]ができ、ドイツ式女性ディアコニーの日本派遣が決まりました。

日本ではキリスト教の社会運動家や一部の牧師が女性ディアコニーの普及に積極的でした。主に、賀川豊彦氏の影響が大きかったです。彼はドイツを訪問した時にディアコニッセの看護姿勢に感激し、「1000人のディアコニッセを日本に送ってください」と要請したとの記述が残っています。キリスト教的な隣人愛に基づいたディアコニッセの社会奉仕活動は、日本のキリスト教会の強

化に貢献できる、と（男性）牧師たちは考えたのです。言葉で伝えるだけでなく、実践的な生活につながる活動により、信仰心が深まるという考えがありました。また、戦後の男性不足によって結婚できない女性が多くなっていたので、彼女たちが福祉の奉仕活動をしつつ、母の家という共同体で「安全」に生活するというロールモデルを提示することもできると考えられていました。当時の日本社会はフリードナー時代のドイツ社会の状況に似ているとドイツ側からも日本側からも発言がありました。

こうした考えから、1952年と53年に2人のディアコニッセが東京に派遣されました。プレーメンの母の家所属のシュベスター・ハナ（Hanna Refeld）とシュベスター・エリーザベト（Elisabeth Vöhringer）です。二人は東京で深津牧師と出会い、彼の女性ディアコニーの計画に賛同し、その実現に大きく貢献しました。彼女たちは日本人ディアコニッセの志願者の教育にあたりました。1954年、日本で最初の母の家である「ベテスタ奉仕女母の家」が創設され、日本人ディアコニッセ志願者との共同生活が始まりました。天羽さんはその4人のうちの一人でした。

同じ頃に浜松と神戸にもドイツ人ディアコニッセが到着し、女性ディアコニーが始まりました。奉仕内容、組織などは東京と異なりましたが彼女たちの役割は似ていました。毎日の奉仕や教育活動以外に、彼女たちはドイツミッション協会の日本委員会や、ドイツの母の家との情報交換を行いました。母の家の建設のためにドイツで寄付を集め、建設の設計・交渉に参加し、母の家の理事会員としての発言権も持っていました。また牧師たちと一緒に

日本の役所を廻り、予算に関する交渉もしていました。日本語も堪能で、高い教養のある女性たちでした。実は、東京や浜松に派遣されたドイツ人ディアコニッセは、もともと日本のディアコニー導入プロジェクトに興味があり、自ら志願をしていた事が残された資料から分かってきています。

東京に来た二人は、来日する前は、売春婦や元売春婦の支援活動に関わった事はなかったのですが、日本の売春婦の状況を目にし、彼女たちの支援をする必要があると考え、同時期にドイツから日本に派遣された深夜伝道の女性伝道師と協力し、定期的に情報交換しながら活動しました。また日本の政治、社会、法律、特に売春防止法を巡る議論に関してもドイツに報告していました。ハナは1957年にドイツに帰りましたが、エリーザベトは1971年までかにた婦人の村やいずみ寮など、ベテスダ奉仕女母の家で重要な役割を果たしました。

私は、ディアコニッセという存在、これまであまり取り上げられる事のなかった、静かに素晴らしい実践をしていた（まだしている）、力強い女性たちの重要な女性支援に対する活動について、少しでも多くの人に知っていただきたいと思っています。